

**非核・平和宣言都市**

核兵器の廃絶と平和を願う全ての人々と相携えて行動することを決意し、平成18年5月25日、『非核・平和都市』宣言を行い、『日本非核宣言自治体協議会』に加入しました。

**平和市長会議への加盟**

平成22年1月1日に『核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画』に賛同する世界各国の都市で構成されている平和市長会議に加盟しています。

**ヒロシマ・ナガサキ被爆ポスター展**

毎年開催しており、今年も8月3日～31日まで、市役所1階ロビー・香北支所・物部支所で『ヒロシマ・ナガサキ被爆の実相等に関するポスター展』を開催しました。

**香美市戦没者追悼式**

香美市では、毎年、戦没者の追悼式を行っています。今年は、新型コロナウイルス感染症の影響により開催が危ぶまれましたが、10月16日、中央公民館で無事に執り行われました。

参列した人たちは、戦争の悲惨さと平和の尊さを未来へと語り継ぎ、心豊かな社会を築いていくことを改めて誓い、戦争で尊い命を落とされた方々のご冥福を祈りました。



**子どもと生きた**

夫には3回、赤紙(※)が来ました。最初は中国北部に出征して半年で帰り、2回目は満州に出征、無事に帰ってきてくれました。出征する時はいつも朝倉まで見送りに行き、3回目の出征の時には、家族の者だけでひっそりと見送りました。そして、夫は二度と帰ってこることはありませんでした。戦死の知らせは多分、役場の人と思うが、その人が書いたものを持ってきて、ただ戦死したことを事務的に知らせる帰っていきました。遺品も何も帰ってきま

せんでした。終戦後、夫と一緒に話をつたという野市の方に話を伺うと、詳しく知っている方を紹介してくれ、手紙を出したところ、戦死したときのことを詳しく書いて送ってくれました。涙が止まらず感謝の気持ちでいっぱいだったことを覚えています。それからの生活は苦労の連続でした。夫もわたしも香北町の生まれではなかつたため、米を作る田や畑はありません。病気がちの両親と、二人の子どもを養うため、必死で働きました。近所の人の好意で農業の手伝いをさせてもらい、野菜

を分けてもらったり、着物を縫わせてもらったりしました。昭和23年頃からは道路工事の仕事にも出るようになりました。雨の日にはかっぱもないので濡れになり、弁当が雨に濡れないよう、道路の横にあるお墓の傘の中へ頭をつっこんで食べました。おかげで、子どもたちを学校にやることができました。今でも寝ていて目が覚めると、戦中・戦後のことを思い出し、ふっと涙が出ることがあります。 ※召集令状のこと。軍隊が在郷の予備役を招集するために個人あてに配布する。

**みんなの平和**

— 太平洋戦争開戦日(12月8日)だからこそ平和について考える —

香美市戦没者追悼式は、例年5月に行われていますが、今年は新型コロナウイルスの影響により、10月16日の開催となりました。戦後、75年を迎える本年に感染症による未曾有の危機を迎え、世界情勢も大きく動こうとしています。

このような時世だからこそ、もう一度、平和について考えていきましょう。



▲平成18年2月10日発行。昭和43年にも発行しているので、続編といえる。戦争についての記述も豊富で、今回紹介した体験談以外にも多数掲載。図書館で館内閲覧することができます。

戦後、75年が経過し、現代の子どもたちは、戦争を実際に経験した方から直接話を聞くという機会は少なくなっているのではないのでしょうか。それは同時に、若い世代の『平和』への意識が希薄になっていくことに繋がってしまうのではと、憂慮しています。

20年近く前、私は『香北町史』の編さん委員、7人のうちの1人として活動しており、町史に記す一つの事柄として『戦争』というテーマがありました。戦争を体験された方からお話をお伺いするため、たくさんのお宅を訪問しました。中には、「思い出したくもない！」と怒鳴られ、門前払いされたこともありま。それほど、戦争はつらいものだったんだとあらためて思い知らされました。皆さんから伺った貴重な体験談を記し、後世に伝えていくことは、恒久平和の実現に必要な要素の一つであると確信しています。今回は、その中から二つの話を要約して掲載させていただきました。

昭和十年代の後半から、校区は次第に暗くなっていた。それまでくつきり見えていた蔵がある日、べたべたと黒く汚され、夜は電灯へ覆いをして灯りが外に漏れないようにしたので、文字通り暗闇となった。夜といわず昼といわず、B29の飛行機が飛び、登校する児童たちは防空ずきんをかぶりその爆音を恐れた。米を作っている家でも、米を供出するためだんだん食糧物が少なくなり、白飯の弁当はなく、良くて麦の引き割りが入ったものだった。食べ物配給になったころ、「週一回、お弁当は芋を持ってきなさい」と校長先生が言い、全児童が恥ずかしがらずに芋の弁当を食べることができた。かぼちゃを主食代わりにする家庭もあり、子どもの顔が黄色くなってきた。

授業が終わると時には授業時間中も、児童と教師で勤労奉仕として農家に行き、田植え、稲刈り、脱穀、もみ運び、わら運び、麦踏みなどをして、働き手が戦地に行っているあとの労働力となつて働いた。こんな状態の中でも誰も困った顔をせず、不平、不満を言う者はなく、みんな一生懸命、その日その日を生きていた。学校教育も国の方針で完全に一つの方向に向かっていたので、善悪は別として、ある面ではやりやすかつたと言えるかもしれない。終戦が近づいたころには、それまで召集が免除されていた教師も兵士として集められ、訓練をしていた学校の犠牲者が出た。香美郡の教師も海岸周辺に集められ、竹やりで『一人一殺』の訓練を受けるなど、アメリカ軍の土佐湾からの上陸に備えた。こんな武器のない状態にありながら、「戦争に負ける」とは思わなかつたし、もし思つても口に出すことはできなかつた。

**戦中の学校**

